



2025年 9月25日
第42号

JR 東労組 Yokohama

JR東労組横浜地本

発行人 梶田 優一
編集 情宣 担当
ホームページ



<http://www.jreu-yokohama1.jp/>

イーハトーブ

9月25日号

夏が終わり、東北の山やアルプスでは、紅葉が始まる時期になった。趣味で全国の山々を訪れたが、冷涼とした空気の中、足元の色とりどりの落ち葉を踏みしめるのは気持ち良い。鉄道やバスの車窓から紅葉を眺めることも楽しみの一つだ。

最近、山で気にかかることが2つある。一つは熊による人的被害。住民が襲われたというニュースを目にするようになった。東北や北海道では、熊と列車が衝突する事故もあり、生息地の環境が変化しているのだと感じる。熊が出るのは、人里に食べ物があり、身を隠す森や藪が広がっているからだという。過疎化が進み、人が少なくなった集落や耕作放棄地が森に還ったり、藪に覆われたりしている。里山と奥山という言葉があるが、かつて人々が手入れすることで保たれてきた里山が段々と失われているのだといえる。

もう一つの気がかりは、登山道の荒廃である。私が長年見てきた天城山は、かつては登山道の左右をびっしりとクマザサが覆い、夏でも山中は鬱蒼とした雰囲気だった。ところがここ30年ほどで鹿が大幅に増え、かつてのクマザサは食べ尽くされてほぼ見られなくなり、地面が見える明るい山中になった。そして登山道に流れる雨水により年々踏み跡の溝が深まってきた。ついには登山道の溝が起点になり、斜面の崩落も発生している。人間の活動により自然環境が変化させられている。

2つの気がかりから、人と自然の共存について考えさせられる。市街地、里山、奥山。それぞれのバランスが変化し影響が現れてきた。町と町を結ぶ鉄道にも影響がある。人里を離れた区間では、自然の強大な力に耐え抜くための保守は欠かさない。環境の変化の中で、鉄路を維持運営することの難しさは、ローカル線の廃線問題にも通じている。

人間のさまざまな行動が、最終的に何かの変化につながっていく。落ち葉を踏みゆく自分自身の一歩一歩が、世の中の何につながっていくのか。踏みしめながら、歩を進めたい。

(J・Y)

イーハトーブとは

「注文の多い料理店」や「雨ニモマケズ」などの著者として有名な宮沢賢治による造語です。故郷の岩手県をモチーフとし、彼の心の中にある理想郷を示す言葉です。

社会に目を向け、新しいものを積極的に取り入れ、農民の生活向上のために最後まで尽力した宮沢賢治の生き方に学びながら、私たちも外に目を向け、私たちが安心して働き暮らせる理想郷を実現していこうという想いを込め、イーハトーブというタイトルで情報発信を行います。